校長室だより～燦燦～ №７３９

恩返し

2023.4.19

どうしていいかわかりませんでした。初任の小学校から中学校に異動し、中学３年生の授業を担当するようになった私は、途方にくれました。授業をどう進めたらよいのかわからなかったのです。五里霧中、暗中模索、試行錯誤の日々でした。毎時間必死でした。

すがるような思いで、夏の地区中教研研究協議会に参加しました。先生方の実践報告を聞き、「もっと聞きたい」「もっと知りたい」「できれば授業を見たい」と思ったものです。

次の年、研究推進委員になりました。実践発表をすることになっていました。人前で発表するのだから、それなりの授業をしなければならないと考えました。追い込まれて本を読んだり、人の話を聞いたりして勉強しました。結果的に、これがよかったと思います。

２０代後半から３０代前半の時期に、毎年のように発表の機会をいただきました。あの頃は勢いしかありませんでした。発表しても、どうもベテランの先生方の反応がよくないのです。

ある年、一回りほど上の先輩の方の発表がありました。それは、教材研究そのものの発表でした。今までの発表とは違ったもので出色でした。「そういうことか」と頭をハンマーでなぐられたような衝撃がありました。私の発表は、「こういうことをやってみました」という上辺だけの指導法の紹介だったのです。その先輩は、「大事なのは、そういうことではないよ」と伝えたかったのだと思います。

支部を代表して、福島県中学校教育研究協議会に参加したこともありました。公開授業を参観し、各支部からの発表を聞き、初めて福島県内の様子がわかりました。その場の空気を肌で感じ、刺激を受け、ますますやる気が出てきたものです。

中教研を通じて、様々な業務に携わらせていただきました。おかげで人とのつながりができました。人的ネットワークは、今でも大きな財産となっています。また、自分のキャリア形成、キャリアアップにつながったことは間違いありません。

昨年、１１年ぶりに中教研に復帰し、縁あって県中教研事務局の仕事をさせていただいています。常に、約２８００名の会員の皆様の思いや願いを受け止めながら、育てていただいた中教研への“恩返し”のつもりで、変わりながらも時代の要請とともに前に進む中教研のあるべき姿を考えています。これからも人を育てる中教研であり続けるために、力を尽くしていくつもりです。

これは、３月に発行された福島県中学校教育研究会の会報に載せていただいた原稿である。今年度で、“恩返し”も３年目となる。先輩方から引き継いできたものをベースにしながらも、数年先まで見越した改革や運営をしていかなければならない。県内各支部の声、事務局員の考えを聞きながら、一歩一歩前に進んでいきたい。